

在日朝鮮人文学初期の作品における政治性—金達寿『太白山脈』、金石範『火山島』

まず、お断りしておかなければならないことが一つある。それは、要約に示した『火山島』の出版年に間違いがあるということだ。この作品が最初に出版されたのは、雑誌『文学界』の1976年2月号だった。つまり、この作品が出版されたのは、私達のパネルのテーマである60年代ではない。金石範の作品の中には60年に出版されたものもある以上、差しかえるべきか、少々迷った。しかし、金石範の『火山島』のプロジェクトは、ある意味で短編小説『鴉の死』1957年に出版した際にはすでに始まっていたものだ。『火山島』の中に表れる人物は、すでに『鴉の死』の中にも表れており、『火山島』は、決して1976年に始まった作品ではないのだ。こう考えると、『火山島』は『鴉の死』以来金石範の中にあっただけで、60年代という時期にむしろ合致するのだという結論に至った。

先程、二つの作品が朝鮮解放直後の数年を描いていると言ったが、この時期の歴史的背景についてまず簡単に説明したい。1910年の韓国併合によって、朝鮮は日本の植民地になる。朝鮮が独立するのは、1945年に日本が第二次世界大戦に敗れたときのことである。ところが、朝鮮が独立統一国家になるという朝鮮人の期待はその直後に裏切られる。北緯38度の南北朝鮮の分断は、日本の降伏の数日前にアメリカ軍内ですでに決められていたのだ。この分断は、ソ連にも了承されるが、こうしすべては当事者であるはずの朝鮮を抜きに決定された。こうして、北緯38度線以南については1945年～1948年の間アメリカが軍政を敷く。アメリカは海外に亡命していた民族主義者や国内の保守派政治家を優遇する一方で、共産党員の弾圧をおこなう。国連監視下で1948年5月10日に行われた選挙では、韓国の初代国会議員が選出される。そして、1948年8月15日に大韓民国が発足し、亡命先のアメリカから戻った民族主義者の李承晩が大統領となる。このような状況で南朝鮮の単独選挙は分断を動かしがたいものにしてしまうとして、選挙妨害を狙ってゲリラが蜂起したのが済州島四・三事件である。また、この蜂起が島民の圧倒的な支持を受けていた背景には、大部分が共産党寄りだとされる島民に、北朝鮮から逃れてきた右派の若者からなる西北^{ソク}青年団が暴力を振るったことにもある。彼らには警察権が与えられ、法的な規定がまったくないまま、逮捕、拷問がおこなわれた。ゲリラ、そしてゲリラに関係しているとされる島民たちは厳しい弾圧を受け、1949年4月までに島では400あった村のうち170しか残らず、6万人の島民、(5、

6 人に 1 人) が亡くなる。この凄惨な事件は当事者によってあまり語られず、国家やメディアも触れてこなかったため、あまり知られていない。¹

この時期の南朝鮮を描いたのが、金達寿の『太白^{テベク}山脈』と金石範の『火山島』である。『太白山脈』は 1945 年 8 月 15 日から翌年の 10 月 15 日までのソウルを舞台としている。金達寿 (1919～1997 年) の『太白山脈』は『文化評論』の 1964 年 9 月号から 1968 年 9 月号までに連載された。この小説は、四人の主要人物をめぐって展開される。大地主の息子の白^{ビョク}省五^{ソンオ}、植民地時代は特別高等警察官 (いわゆる特高) だった李^イ承久^{スンウオン}、在日朝鮮人で機関紙『京城日報』記者の西^ソ敬泰^{グンテエ}、白省五の妻が借りていた下宿の主人の息子で 19 歳の金^{キム}相寧^{サンニョン}だ。独立運動にかかわったとして逮捕された白省五と西敬泰も小説初めの解放とともに出所する。その一方、彼らを逮捕した李承久は、解放を祝う白省五と西敬泰とは逆に、身の危険を感じ、田舎に逃げる。社会主義を支持する白省五は、大地主であり、かつては親日派、解放後はアメリカ軍政に協力する父とは対立する。そして、農民と生活を共にすることによって、朝鮮の人々を知ろうとする。西敬泰は、朝鮮解放によって『京城日報』での仕事がなくなり、白省五の支援を受けて朝鮮の烈士についての調査を始める。そして、旅行中に出会い、ソウルで偶然再会した金^{キム}分女^{ブンニョ}と婚約する。李承久は同僚たちが警察に戻っているばかりか、昇進しているのを知って、自分もソウルに帰る。そして、警部に昇格して、李承晩に近い人物、S・金のもとで働くことになるが、彼の仕事というのは証拠ねつ造に他ならない。金相寧は共産党思想になじめず、右派の軍人と近づきになり、解放後できたばかりの士官学校を卒業して、李承晩の護衛になる。この小説は、これらの人物を時には交差させつつ、1945 年 8 月 15 日の人々の熱狂から翌年 10 月のゼネスト、その弾圧によってそれぞれの夢が打ち砕かれるまでを描く。西敬泰は結婚を延期し、白省五は再び逮捕される。タイトルの太白山脈は北緯 38 度線に位置する山脈で、南北朝鮮の分断と打ち砕かれた独立の夢を象徴しているのだ。

金石範 (1925～) 『火山島』は、『太白山脈』よりは後の 1948 年 3 月から一年余りの出来事、つまり済州島四・三事件の前夜からゲリラが壊滅するまでを描いている。全 7 巻の小説の長さと比較すると、小説内で流れる時間は非常に短い。それは、この小説が四・三事件そのものを中心的に描くのではなく、この事件に絡む様々な人々を描いているからである。主人公の李^イ芳根^{バンゴン}の他に、その妹の有^{ユウ}媛^{ウオン}、在日朝鮮人の南^{ナム}承之^{スンジ}などの主要人物を巡って物語は展開される。李芳根の父は会社社長で、彼は裕福な家の息子だ。しかし、かつての親日派で右派の父とは逆に、彼自身は共産党に近い。ただ、党の組織には直接参加せず、蜂起の外にいるが、何かとゲリラに便宜を図る。南承之は在日朝鮮人だが、親の

¹ 金石範『《火山島》小説世界を語る!』、右文書院、2010 年、82 頁

故郷の済州島に戻り、中学校の教師をしていたが、今はゲリラ活動に身を投じている。南承之と有媛はお互いに惹かれているが、済州島の状況が彼らの恋の発展を許さない。ソウルで音楽の勉強をしている有媛は、済州島の現実を目の当たりにして、ゲリラ活動に興味を持つ。しかし、この状況を憂慮した兄の取り計らいで、日本に留学する。4月3日の蜂起の日には、静かだった済州島の中心地、城内^{ソンネ}は、ゲリラの弾圧が進につれて変わっていく。12月には、ゲリラの生首が曝されるようになり、近隣の村でも虐殺がおこなわれる。そしてゲリラがほぼ壊滅状態に近づいた3月、南承之は逮捕される。それを知った李芳根が賄賂を支払って釈放させ、日本に送る。裏切り者の制裁のために自らも殺人を犯し、絶望した李芳根は自殺する。

これらの二つの小説は、朝鮮解放後の数年をどちらも扱っているという点の他に、在日朝鮮人、ブルジョワジーといった人物を登場させている点でも共通している。これは決して偶然ではなく、二人の作家がどちらも、おそらく「朝鮮」を描くことに重点を置いていたからである。作者は様々な階級や思想を持つ人物を意図的に登場させているのだ。こうして、プロレタリア階級とブルジョワジー、左派と右派がそれぞれの利害を持ってせめぎ合う朝鮮社会が描かれているのだ。

このように見ていくと、金石範も金達寿も単に歴史的事件を描いているのではない。そして、「歴史小説において大事なことは、歴史上の大事件を再述することではなく、この事件のなかで形成された人間を芸術的によびさますことである」とするルカーチの定義にも沿った歴史小説なのである。二人の作家の試みは、まさに朝鮮の「歴史小説」を日本語で書くことであったのではないだろうか。そして、それは、世界レベルで見ればマイナーである日本語文学の中でもマイナーな在日朝鮮人文学から出発しつつ、文学の普遍性に至る試みでもある。

金達寿は『太白山脈』のあとがきで次の用に述べている。

さきにみた日共「主流派」はのちいわゆる「火炎ビン闘争」の極左冒険主義におちいってたくさんの犠牲者をだしたが、それとおなじようなことが朝鮮戦争以前、すでに南朝鮮ではおこっていた。

しかも日本のそれとはくらべものにならないほど深刻なもので、その犠牲者は十万人とも十三万ともいわれた。しかしそれは、「極左冒険主義の誤り」という一片の政治的総括によって、人々からは忘れ去られようとしている。だが、それでいいのだろうか。

きざないいい方かも知れないが、もと人間学である文学にあっては、そうはゆかないのである。南朝鮮のばあいもとても深刻であったのは、一九四八年の四・三蜂起には

じまるゲリラのそれだったが、そのようなことはいったいどうしておこったのであり、また人々はそのような状況をどう生きたか、あるいは生きることができなかったか、ということ文学は明らかにしなくてはならない²。

1. 忘れてはならない歴史、終わらない植民地主義

それでは、二人の作家はそれぞれ「忘れ去られようとしている」歴史をどのように描いているのだろうか。

『太白山脈』の冒頭で解放に沸き立つ人々が徐々に気付くことは、待ち焦がれた独立が果たされないということである。ただでさえ地主に搾取されている小作農たちは、自省五の前に嘆く。

「出来高調査って、それは何だね。やってくるって、どこから—」

「面事務所（村役場）からですよ。以前は日本の憲兵が警察といっしょに来たものだったが、こんどは黒いトラックに乗ったアメリカ兵がいっしょだそうです。そして奴らはまた、ごっそり持って行ってしまいうちにちがいない³」

農民たちは、地主に7割の小作料治めなければならないだけでなく、収穫した作物の中から税金を支払わなければならない。植民地時代、その額は収穫前の田を偵察に来る憲兵が決めていた。ところが、日本人は出て行ったものの、アメリカ人がその代わりにやって来るといふのだ。解放後の朝鮮で、植民地時代の機構がそのまま機能しているわけである。日本の代わりにアメリカ。この構図は、まったく別の場所でも見いだされる。例えば、金相寧の士官学校はかつての志願兵訓練所の建物にあり、「変わったことはといえば、その教官が、日本人からアメリカ人となっただけだった⁴」。

そして、この新たな植民地時代の到来は、李承久に関するエピソードにもっとも象徴的に現れている。朝鮮人から嫌われる特高だった彼は、かつて彼に逮捕された人々から制裁を受けてもおかしくない。ところが、特高時代の行為が問題になるどころか、当時の手腕を買われて出世するのだ。また、アメリカの利益に沿った彼の新しい職務は、解放後の警察が特高と同じように無実の人々を刑務所に送り込むのだということも示している。

² 金達寿『太白山脈』（『金達寿小説全集七』）筑摩書房、一九八〇年、506～507頁

³ 金達寿、同書、469頁

⁴ 金達寿、同書、157頁

このような状況は、大統領の護衛隊となった金相寧に関するエピソードにユーモアを交えて描かれる。

「オー、よい青年。わが国の、よい青年なのじゃな」

金相寧は顔を真っ赤にして、ただそこに立っているばかりだった。

李承晩は朝鮮語になってそうだったが、それはまるで、英語のアクセントをもって話しているような、そんな朝鮮語だった。そして頬にあたった手の感触はかさかさしていたが、それでいて変に冷たかった。

「オー、そうか」と李承晩はひとりうなずいて、聞き取りにくい朝鮮語でまたつづけた。「わしはの、わしはユーのような、強い青年学徒がいちばん好きだ。また、信じてもおる。わしのもとに団結するのだ。わしのもとに、な。しっかりたのみますぞ⁵」

「オー」「ユー」、そして「よい青年」「いちばん好きだ」といった不自然な表現に、李承晩の朝鮮語が外国人が話すような朝鮮語だということが表わされている。実際の李承晩が30年以上アメリカに住み、70歳を超えて朝鮮に帰国したとはいえ、このように朝鮮語を話したかは定かではないし、おそらく事実ではないだろう。この英語交じりのたどたどしい朝鮮語は、この人物が朝鮮人であるよりアメリカ人であることを示している。つまり、彼の韓国大統領としての資質が疑問に付されているのだ。それと同時に、この人物が「傀儡」政権の大統領であることを象徴しているとも読めよう。

『火山島』においても、植民地時代の負の遺産は数々現れる。そして、やはりそれはしばしば警察と関わる。

「うむ、その調べにあたったのが、殺し屋みたいなひどい面相の男で、関釜連絡船で十五年刑事をしていたと自分でいうんだ。日本の警察でだぞ。こいつが先頭に立って拷問をしよう。奴らのセリフは、とにかく、正直に吐けなんだ。とにかくしゃべれと来る。焼酎をあおりながらしまいには殴られる私と一緒になって、猛獣みたいに吼えよったよ、まるで自分が拷問されるみたいになあ。逆さに吊してからも拷問しよったが、気がついてみたら、どうだ、眼のまえで知ってる男がやられてるんだよ。ああいうのを見るのは辛いもんだ。うむ、一人の男は私の眼のまえで素っ裸にされてから、チャジ（男根）を縄でくくって引っ張られながら殴られる。ひどい奴らだ。み

⁵ 金達寿、同書、418頁

んな日本の特高から引き継いできたやり方なんだ。しかし、最後に相手方が私に降参したよ。呆れたらしく、先生とぬかしよった。先生参りましたよとな⁶」

ゲリラの幹部である康^{カン}蒙^{モン}九^{モウ}は、南^{ナム}承^{ソウ}之^ジにユーモアを交えて話す。しかしこのエピソードは、解放後の朝鮮で日本の特高がおこなっていたのと同じ拷問がおこなわれていることを示している。『太白山脈』の李承久も元特高であるが、この拷問執行人も日本の警察での残虐行為をそのまま引き継いでいるのだ。特高と解放後の警察の間の密な関係は、二つの小説のどちらにも現れている。

『太白山脈』の登場人物たちが怖れていた独立の喪失は、『火山島』では揺るぎないものとして現れる。その行き着く先が虐殺なのだ。

ここが、この土地が“戦場”だといえ、戦死者の山ということばが通りもしようが、いったいここが如何なる戦場なのか。往昔の征服者、蒙古との戦争か。日本軍との戦争か。アメリカ軍との戦争か。たしかに国防軍の背後にはアメリカ軍が控えていて彼らの作戦に拠っているのは事実だが、目下本土から入島してきた同じ朝鮮人、そしてそれに与する同じ済州島人とのあいだで起こっている“同族相残^{トンジョクサンジャン}（相闘）”が戦争であり、そしてこの土地が戦場なのか⁷。

日本による植民地時代の人々の苦しみもさることながら、朝鮮の独立は冷戦構造の中で、いわば略奪された。しかし、もっとも癒しがたい傷は、この済州島四・三事件で極端な形で噴出したように、かつての日本人に朝鮮人自身が取って代わったということであろう。この小説は、外国からの暴力、そして内部の暴力の告発であり、それと同時に磯貝治良が指摘するように「統一への希求」⁸の表現でもあるのだ。

2. 日本語で朝鮮を描くことのパラドックス

この二つの作品に共通するさらにもう一つの点は、日本語で朝鮮を描いているという点である。このパラドックス、そしてそこに潜む植民地の暴力は、作品の中にもたびたび表面化する。

⁶ 金石範『火山島 II』、文藝春秋、[1983年]、1984年、44～45頁

⁷ 金石範『火山島 VII』、文藝春秋、1997年、396頁

⁸ 磯貝治良『〈在日〉文学論』、新幹社、2004年、172頁

名門校の京城中学に通う金相寧は図画の時間に「水色」という日本を思い出せず、「ぎょくしょく（玉色）」と言ってしまい、同級生たちの嘲笑を買う⁹。金相寧は、朝鮮語で漢文を学ぶために別の学校へも行ってた。彼はこの間違いはそのせいだと考える。一方、このエピソードが示すのは、植民地の学校で日本語が強制され、朝鮮語が排除されていたこと、さらには、朝鮮語が蔑まれていることだ。一見すると、子供時代のたわいない思い出のようなこの部分は、言語にまつわる問題を提起している。こうして、金達寿は読む読者にこの日本語の小説が、植民地支配の結果生まれたものであり、二つの言語の間にまたがっているのだということ、そして言語の葛藤を抱えているのだということをおこさせるのだ。

この日本語の暴力は、『火山島』でも提起される。李芳根は、日本に渡った朝鮮人が「ウドン」と「フトン」を混同し、寒い夜に「ウドン」を探し回ったという話を思い出す。

しかし、間違っているあいだは、まだいい状態というもの。間違ふことがあり得ない。そのものとしてことばが柔らかい意識に打ち込まれたとき、それが自分たちのことばそのものの正体はどこへ行くか。ウドン、フトン……。これらの日本語の音節の響きは血みどろの胎盤のように朝鮮語が母体から剥がれ落ちる音に取って代わったのだった。このことを考えると、「八・一五」は自らのことばを取り戻したことで、それだけは解放に値する……¹⁰。

母体のメタファーは母語でない言語の侵入を象徴している。朝鮮人の日本語使用が日本による母語の否定という暴力の上に成り立っているのだということが、ここで示されているのだ。その一方で、小説の中では朝鮮語の逆襲も存在する。それは、朝鮮語への日本語への侵入ではなく、日本語への朝鮮語の侵入という形で現れる。

「わたしは日帝時代イルチェンデの昔から警官というのは嫌いなんだ。倭奴ウエーナムの尻にくっついて、ちゃらちゃら腰の剣を鳴らしながら、どんなことをしたかい。自分の国ナラが独立したというのに、警察はおんなじことだからね。はじめのちょっとのあいだだけだったよ、よかったのは……¹¹」

⁹ 金達寿、同書、83頁

¹⁰ 金石範『火山島 IIII』、1996年、28頁

¹¹ 金石範『火山島 II』、同上、8～9頁

これは済州島四・三蜂起の準備をする農民たちの会話である。金石範は済州弁を日本語に表現するのに苦労したとインタビューの中で語っている¹²が、ここでは朝鮮語の交じった日本語が済州弁の表現に使われているのだ。この混成語化した日本語は、明らかに会話に躍動感を与えている。それと同時に、これは二つの言語を知る作家によってのみ可能な実験であり、現存の文学を越える試みに他ならない。

金石範は日本語で書くことについて、次のように語っている。

日本語で朝鮮について一在日朝鮮人も含めて一朝鮮人の意識とか生活といういわば朝鮮的なテーマで書くのが在日朝鮮人であるというのが金達寿さんなんかの見解であり、それは常識的にはそのとおりなのですが。私としては、規定するというよりも、どのようにあるべきものとして在日朝鮮人文学を見るか、見たいか、あるいは自分がどういう作品を書きたいかという欲望ともかかわっているわけです。それはまた自分を束縛し抑圧することばを、いかに自分を解放し、自由にすることばに転化させていくかという作業にもかかわっているわけです。今まで在日朝鮮人文学というのは、ほとんどというより疑われることさえなく、日本文学であると、日本人作家の書くものと同質なものであると受け取られてきたんですよ。しかし私は日本語で書かれた文学の中で独自の性格をもつもの、独自のでありながらしかも普遍に通じるもの、そういう文学を創っていかないことには日本語を使う在日朝鮮人作家として自分に自由を保障するのは非常にむづかしいんじゃないかと思うんですね。それで私は、ひところ、日本語文学であるけれども日本文学ではない、独自の文学であると言ったことがあるんです¹³。

在日朝鮮文学がまだ新しい 60 年代、70 年代において¹⁴、新しい日本語文学を創るという試みが作家の念頭にあったことは、このようにははっきりと述べられている。金達寿と金石範は日本語で朝鮮の歴史を描いた。それは、日本語文学の中に朝鮮とその歴史を持ち込み、二つの言語、二つの国の間に位置する新しい文学の創造でもある。『太白山脈』と『火山島』は、日本語文学を越境させ、新たなエクリチュールを作り出した。また、解放直後の朝鮮という地理的、時間的に限定された空間を描くという作業をとおして、国や言語の制限を超えようとする試みにおいて、歴史小説としての普遍性を獲得するのである。

¹²金石範『《火山島》小説世界を語る！』、同上、75 頁

¹³金石範『民族・ことば・文学』、創樹社、1976 年、53～54 頁。下線は著者による。

¹⁴磯貝治良は、「在日朝鮮人文学」という呼称が確立し始めたのは、1960 年代中頃からだとしている。磯貝治良、同書、12 頁

金達寿の『太白山脈』と金石範の『火山島』は、このように隠蔽された歴史を暴き、暴力を告発するという政治的試みである。その一方で、その試みは日本語文学に穴をうがつという狙いに基づいたものである。つまり、これは二重に政治的な試みなのである。